

〈論 文〉

日本語書き言葉における無生物主語他動詞文
—許容される条件をめぐって—

車 魯明¹ (東京外国語大学大学院博士後期課程)

On Transitive Sentences with Inanimate Subjects in Japanese Written Language

Che, Luming (Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード: 無生物、他動詞、主語、人、自動詞文

Key words: Inanimate, Transitive, Subject, Human, Intransitive sentences

要旨: 本稿は日本語の書き言葉において、無生物が他動詞文の主語に立つ「無生物主語他動詞文」が許される条件を考察することを目的とする。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の検索アプリケーション「中納言」(通常版) を利用して無生物主語他動詞文の実例を手作業で抽出し、考察を行う。その結果、3 つの許容条件を提案する。調査した無生物主語他動詞文のうち、この 3 つの条件のどれか一つを満たすものは総用例数の九割以上を占めることがわかる。このことは従来の名詞句階層説よりも、複数の許容条件を想定することによる説明のほうがより説明力があることを示唆する。

Abstract: The purpose of this study is to clarify what are the admissible conditions for transitive sentences to have inanimate subjects in the written Japanese language. The examples used and analyzed in this paper are extracted from ‘Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’ (BCCWJ). The analysis shows that there are three conceivable conditions, and more than 90% of examples satisfy at least one of them. This result suggests that explanation through assumption of multiple conditions has more explanatory power than the noun phrase hierarchy theory.

原稿受理日 (2017-10-02)

査読後掲載決定日 (2017-11-07)

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp17-34. ISSN 2433-8923



¹ 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに

日本語では無生物が主語の位置に立つ他動詞文は不自然、或いは翻訳調的だと論じられてきた。

(1) 大波は私をさらった。(角田 1991 [2010 : 51])

(2) コピー用紙が手を切った。(熊 2009 : 2)

(1) と (2) において、主語である「大波」、「コピー用紙」は意志を持たない無生物であって、それぞれ目的語である「私」、「手」に意図的に働きかけ、変化させることができないとみられるため、日本語として不自然だと判断されている。

一方、(3)、(4) のような、主語が無生物であっても自然に感じられる他動詞文もあり、実例 (例 (5)、(6)) の調査からもこのような文は少なからず存在することが確認できる。

(3) 津波が三陸地方を襲った。(角田 1991 [2010 : 51])

(4) 彼の言葉が彼女を傷つけた。(熊 2009 : 3)

(5) 朝が近づいてくる気配が世界中を満たす。(キッチン)

(6) その遺族に対する心遣いが、いつも私にいたたまれない思いを宿す。(WILL)

(1)、(2) と比べて、なぜ (3) ～ (6) のような文が許容されているか、さらに日本語においてこの種の他動詞文はどこまで許容されるか、何に関係するかなどのが従来疑問とされてきた。

これらの問題を解決するには、この種の他動詞文の表わし得る意味から検討する必要があると考えられる。本稿は無生物が主語に立つ他動詞文——「無生物ガ～ヲ～他動詞」——を「無生物主語他動詞文」と呼び、これらの他動詞文の表わす意味に注目しながら無生物主語他動詞文の許容条件を分析することを試みる。

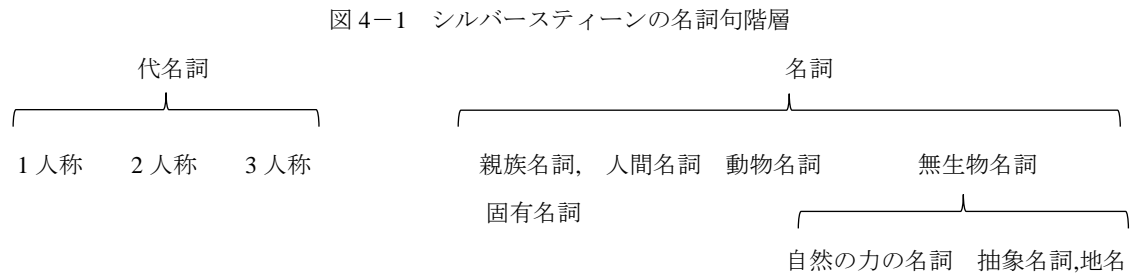
2. 先行研究

本節では、無生物主語他動詞文について詳しく論じている角田 (1991) と熊 (2009) を紹介する。両者に共通にみられる特徴としては、無生物が他動詞文の主語に立つ理由の究明にあたって、「名詞句階層」を用いているというところである。

角田 (1991 [2010 : 41]) では名詞句階層を、日本語における他動詞文の主語になりやすさの度合いを反映するものと述べ、階層の高い位置を占める名詞 (例えば「自然の力の名詞」) は主語になりやすく、相対的に低い位置を占める名詞 (例えば「地名」) は主語になりにくいという。例えば前節であげている例 (3) の成り立つ理由はこの階層で説明できる。角田 (1991 [2010 : 41]) で提案している名詞句階層は以下のとおりである²。

² 角田 (1991[2010 : 41]) によると、この階層は Silverstein (1976) の名詞句階層に修正と追加をしたうえで提案したものである。

図1 角田（1991）の名詞句階層

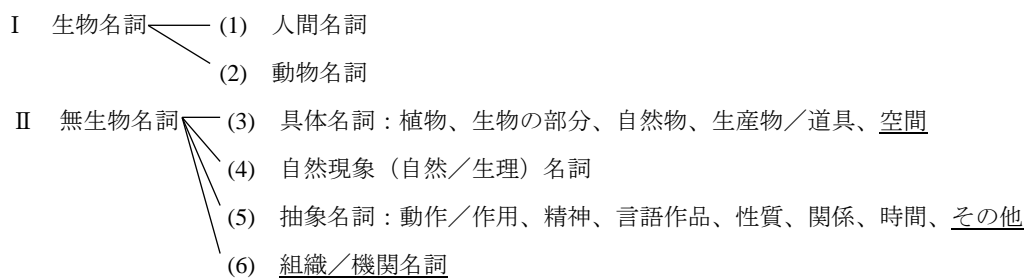


（角田 1991 [2010 : 41]）

一方、熊（2009）は角田（1991）よりも無生物名詞を細かく分類したうえで、現代日本語における無生物主語他動詞文の使用実態を、日本語の文章を調査することによって考察を行っている。熊（2009）の名詞分類は以下のとおりである³。

図2 熊（2009）の名詞分類

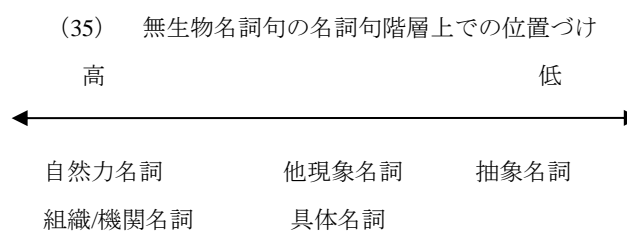
（14）本書の名詞分類



（熊 2009 : 21）

実例に対する考察の結果、熊（2009）は下記の名詞句階層を提案している。

図3 熊（2009）の名詞句階層



³ 本稿で用いる名詞の下位類の規定については熊（2009 : 20）を参考になっている。例えば、「具体名詞」は物理的にその存在が感じられるものと規定する。

図に表示されているように、左側に進めば階層が高くなり、右に進めば階層が低くなる。2 種類の名詞句が主語と目的語として選ばれる際、左側のものが主語になりやすく、右側のものが目的語になりやすいと考えられる。

(熊 2009 : 63)

しかし、名詞句階層で説明できない無生物主語他動詞文の実例が存在する。

(7) 長身の京也に前に立たれ、妙な威圧感が香織を襲った。(闇天使)

(7) は主語が無生物名詞の下位類——抽象名詞で、目的語が人名詞であるため、名詞句階層説に反している。車 (2014) でも大量のデータに基づく検証から名詞句階層説に限界があることが確認されている (詳細は第 4 節で述べる)。

本稿は無生物主語他動詞文の出現する許容条件をめぐって、名詞句階層説以外の観点から考察することを試みる。

3. 研究方法

本稿は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』⁴の検索アプリケーション「中納言」(通常版)(BCCWJ-NT、以下 BCCWJ とする)を利用して無生物主語他動詞文の実例を収集し、分析を行う。

まず、キーワードとなる他動詞を得るために、予備調査を行った。予備調査では文学作品 13 点から無生物主語他動文を構成する他動詞を抽出し、検索のリストを作る。この調査で他動詞 134 語を得た。

開ける、上げる、与える、温める、圧迫する、浴びる、表わす、暗示する、威圧する、意味する、彩る、受ける、失う、歌う、打つ、映す、裏付ける、描く、追い込む、追い詰める、追い抜く、追う、覆う、行う、収める、押す、襲う、落とす、帯びる、下ろす、変える、抱える、掻き消す、隠す、囲む、飾る、掠める、語る、鑑賞する、刻む、傷付ける、切り裂く、強調する、区切る、擦る、下す、蹴飛ばす、蹴る、壊す、遮る、下げる、支える、さす、擦る、冷ます、刺激する、縛る、示す、遮断する、象徴する、吸い取る、透かす、救う、染める、叩く、立てる、保つ、散らす、直撃する、使う、掴む、作る、告げる、伝える、包む、包み込む、募る、潰す、強める、吊り上げる、連れ戻す、照り返す、照らす、転換する、唱える、止める、捕らえる、取り巻く、無くす、慰める、撫でる、残す、乗せる、伸ばす、濡らす、弾く、放つ、引き受ける、引き起こす、浸す、冷やす、含む、塞ぐ、振る、包囲する、解す、掘り返す、撒き散らす、巻き戻す、巻く、増す、守る、見下ろす、見据える、見せる、満たす、見詰める、迎える、齎す、持つ、求める、戻す、貰う、揺らす、許す、喜ぶ、揺さぶる、揺るがす、宿す、汚す、呼び出す、呼び止める、呼ぶ、分ける

⁴ 国立国語研究所によって開発され、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって 1 億 430 万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。そのうち、「中納言」はコーパスを検索することができる Web アプリケーションである。短単位・長単位・文字列の 3 つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。(国立国語研究所コーパス開発センターホームページより)

次に、以上の他動詞をキーワードとし、「中納言」（通常版）に入力して検索を行う。
各他動詞から得られたデータを手作業で無生物主語他動詞文を抽出する。

BCCWJ における検索条件の設定は以下のとおりである。

短単位検索

- ・ キー：語彙素が（指定した他動詞）⁵
- ・ 検索対象：
出版・新聞（コア非コア）、出版・雑誌（コア非コア）、出版・書籍（コア非コア）、
図書館・書籍（非コア）、特定目的・白書（コア非コア）、特定目的・ベストセラー（非コア）、
特定目的・知恵袋（コア非コア）、特定目的・ブログ（コア非コア）、
特定目的・法律（非コア）、特定目的・国会会議録（非コア）、特定目的・広報誌（非コア）、
特定目的・教科書（非コア）

例えば、予備調査で小説から「重苦しい沈黙が店内を包んだ。」（『WILL』）という無生物主語他動詞文を探し出し、その述語他動詞「包む」を「中納言」のキー欄に入力して検索するのである。

BCCWJ を検索した結果、134 語で合計 957,661 例が検索された。調査の便宜上、実例数 1 万以上例がある他動詞について、「中納言」（通常版）の出力順の上位 1000 例⁶を取って、合計 301,464 例を調査することとした。その中から無生物主語他動詞文は 6,594 例を抽出した。他動詞ごとに収集した実例数の統計および出現率の計算と分析については、稿を改めて検討することにする。

4. 考察

第 3 節の調査から、名詞句階層説で説明できない実例が少なからず見いだせる。

- (7) 「どれだけ積もった？」清衡は兵らに質した。「すでに一尺を超えましてござります」「一尺とな」慌てて清衡は立ち上がって外に飛び出た。重く湿った雪が容赦なく清衡を襲った。「これは…」清衡は絶句した。一面が深い雪原に変えられていた。
(炎立つ)
- (8) 「ローレンス？」彼が、なんだというように顔を向けた。和葉はそっと瞳を向けて尋ねた。「あなたのフルネームは…ローレンス・カベンディッシュなんですね」彼の色薄い瞳が、じっと和葉を捕らえる。真面目な顔で無言のまま長い間見つめていたが、やがて静かに頷いた。(英国紳士の野蛮なくちづけ)
- (9) これまで何度も何度もその部屋を訪れたことがあったような錯覚を覚え、信太郎に椅子を勧められる前に、自分から革張りソファの上に腰をおろした。ソファ

⁵ 漢語サ変動詞の場合、【キー：語彙素が（指定した漢語サ変動詞）、後方共起 1：書字形出現形がする】というふうに設定している。

⁶ 車（2014）では実例数が 1 万例以上ある「受ける」と「変える」の 2 語については、「中納言」の出力順の上位 3000 例をとって調査している。本稿はこの 2 語の調査をそのまま使用することにした。

一は弾力性を失っていて、座ると私のお尻の形に沈んでいった。(恋)

(7)、(8)、(9) の用例において、主語名詞句と目的語名詞句との階層をそれぞれ比べてみると、(7) は主語名詞が自然現象名詞「雪」で、目的語名詞が生物名詞「人」であり、(8) は主語名詞が具体名詞「瞳」で、目的語名詞が生物名詞「人」であり、(9) は主語名詞が具体名詞「ソファ」で、目的語名詞が抽象名詞「弾力性」である。どちらの用例でも主語名詞の階層より目的語名詞のほうが高い位置を占めているため、名詞句階層に反していると言える。

先行研究で提案している名詞句階層説の有効性について、車 (2014) では実例に基づいて検証を行っている。具体的には、予備調査から収集した実例の中から 2 回以上出てきた他動詞 34 語⁷を取り、BCCWJ で検索した。その結果、集めた 1,535 例の無生物主語他動詞文のうち、名詞句階層に沿っているのは 980 例 (63.8%)、名詞句階層に反しているのは 555 例 (36.2%) であった。名詞句階層で説明できない無生物主語他動詞文が 3 割以上あることは、名詞句階層説の説明力には限界があることを示唆しており、名詞句階層説と異なる観点からの考察が必要であると考えられる。

上記の (7)、(8)、(9) をはじめとする実例の検討から、無生物主語他動詞文はなにかの条件を満たすことで許容されるのではないかと考えられる。たとえば、例 (7) は、主語の指す無生物が何らかの意味で人に準じる性質を有していて、他動詞文の主語に立つことが許容されるようである。(8) は、述べている事態には事実上人がいて、その人の行為の一部を切り取っていることで、無生物主語他動詞文が許容されるようである。(9) は、外形上他動詞文ではあるが、目的語と動詞の組み合わせが意味的に自動詞に相当することから、無生物が主語に立っても許容されるようである。

上記の 3 つの条件は互いに独立で、相互の関係は考えられないが、それぞれの論理で無生物主語他動詞文が許容されると思われる。

無生物主語他動詞文の許容条件は他にもあるかもしれないが、結論を先取りしていえば、少なくとも筆者が調査した約 6,594 例のうち、結果として、上記の 3 つの条件のどれか 1 つを満たすものが 6,472 例、約 98.1% を占める。したがって、従来の名詞句階層説の説明よりも、複数の許容条件を想定することによる説明のほうがより説明力があるのではないかと考える。

以下、無生物主語他動詞文の許容条件として想定されるものを大きく、「人に準じるものが主語に立つもの」、「事実上人の行為の表現になっているもの」、「事実上自動詞述語文に相当するもの」の 3 つに分けて、それぞれがなぜ許容条件として機能するか、また、下位タイプにどんなものがあるかについて分析する。

⁷車 (2014) では他動詞 36 語を調査したが、そのうち実例数が 1 万例以上ある「受ける」と「変える」については、「中納言」の出力順の上位 3000 例しか調査していない。ここでは精度を上げるために「受ける」と「変える」の例を除くことにした。

4.1. 人に準じるものが主語に立つもの

このタイプの無生物主語他動詞文は、人に準じるものが主語に立ち、その動作・作用を表現するものである。主語は人ではないけれども、本質的には他の作用を受けなくても自ら動き、あるいはそのものの性質を以て他に影響を及ぼし得る存在であり、事実上、人主語と同じような振る舞いをしていると言える。

主語の位置に現れるものの下位類において、「主語が組織・機関名詞であるもの」、「主語が乗り物名詞であるもの」と「主語が自然現象名詞であるもの」の3種類に分けられる。

①主語が組織・機関名詞であるもの

組織・機関は複数の人々によって構成、運営されている。「国」、「政府」、「企業」などはその下位類である。熊（2009：35）ではこのような名詞が主語に立つ文を「組織／機関名詞」の無生物主語他動詞文とし、「組織／機関」名詞とは、人間の活動を背後に強く意識させる政府、会社、学校などの機関を指す名詞のことである。このような名詞は人間の存在が背後に暗示されているため、他動詞文の主語になりやすいと思われる（後略）」と述べている。

組織・機関は、そこに属する人々全体がひとつの単体として一個の人のように行動するものだと言える。このようなものを指す名詞が主語に立つ場合、目的語である人やものに働きかけたり、影響を及ぼしたりすることが容易に想像できる。そのため、この種の文は許容されやすいと言えよう。

- 1) だが、七時すぎて、「今日は尼宮様はお上がりにならんようで…」と訂正した。「へえ、休みの時もあるのか？」八時半。門前町の店々が一斉に戸を開けた。（日本列島すぐ蕎麦の旅）
- 2) 同県は、アンテナショップの運営を希望する企業を募り、開店から3年間に限り、家賃相当分の費用を県が補助している。（毎日新聞）
- 3) だがブッシュ政権は、「イラクによる大量破壊兵器開発の明確な証拠」を提示できていないうえ、フセイン政権とアルカイダとの関係の証明も難航。アラブ主要国やイスラム諸国は慎重・反対論を唱えている。（毎日新聞）

1) の「店」は人が経営するものであり、かつ人のまとまりでもある。2) の「県」は人によって統括され、全体としてまたひとつの単体として活動する。3) の「アラブ主要国やイスラム諸国」もひとつの単体であることが常識的に想定されやすい。この場合、組織・機関名詞主語は事実上一個の人のように「開ける」、「募る」、「唱える」などの動作を行うということである。

②主語が乗り物名詞であるもの

乗り物は人の操作があってはじめて起動し、人の操作に従って動くものである。外見から見る限りでは自らエネルギーを発する性質を持ち、他の人やものに働きかけることが可

能である。この意味で、乗り物は操作している人の延長とみることができ、わざわざそれを操作している人を明示しなくても許容されると考えられる。

4) 彼は窓を閉めると、慌てて身を伏せた。スポーツ・カーは物凄い爆音を発しながら、空気を切り裂き、通り過ぎていった。上り路線が走行を開始した。彼はホッとしたように、軽くアクセルを踏んだ。(狂気の右ストレート)

5) 国道十号線に出てバス停に立っていると、小倉のほうから走って来た乗用車がスピードを落とし、二十歳ちょっとくらいのカラーシャツにネクタイの男が乗せてやろうというように笑いかけたが、畑千代子は背中を向けて海のほうを見た。(復讐するは我にあり)

4) では、「スポーツ・カー」が一個の、自らエネルギーを発する性質を持つ単体とみることができ、その性質によって「爆音を発する」ことが実現され、さらに「空気を切り裂く」というようなことが実現される。5) では、「乗用車」がそれ自体に備わっている仕組みによってスピードを落とすという動きが実現されると言える。4) と 5) とどちらも操作している人の延長とみることができ、その人をおもてに（つまり他動詞文の主語に）出さなくても、無生物主語の他動詞文として許容される。

③主語が自然現象名詞であるもの

このタイプには主語が「太陽」、「陽射し」、「雪」など自然現象を表わす名詞であるものと、「台風」、「津波」、「地震」など自然災害を表わす名詞であるものがある。本稿は両者を合わせて「自然現象名詞」と呼ぶことにする。これらは、人為が加わっておらず、且つ自らエネルギーを生じさせることができ、状況が整えば他のものに、さらに人にも働きかけるという性質が備わっている。一見人とは全く無関係のように見えるけれども自律的に動くことからいうと、いかにも人のような振る舞いをしていると言える。

このタイプの無生物主語他動詞文は自然に発生する出来事を表現している。

6) アフリカに雨期が近づいていた。風が湿気を運び、ときどき雷鳴が走る。ときにスコールがきて、ガラスが割れるかと思うほどの激しい雨滴が窓を叩く。と、たちまち雨があがり、再び痛いほどの陽が射し、草花が生き返ったように鮮やかさを増す。(遠き落日)

7) 8 畳から鴨川へ「床」(涼み台) がつき出ている。出てみると、涼をふくんだ、意外に強い川風が頬を打った。すぐ北側に二条大橋。小津安二郎や手塚治虫がよく訪れたと主人が言うのもうなずける。(AERA (アエラ))

8) 平成七年(千九百九十五)正月十七日、今度は金兵衛の遺品を守りながら芦屋で生活していた金兵衛の子孫たちを阪神淡路大震災が襲った。(幕末明治横浜写真館物語)

6) の主語「雨滴」は大気から重力によって落下してきて、地上にあるものに当たるのだが、それはそれ自体に備わっている性質によるものであり、外部からの干渉や助けがなく

でも自然に発生する。このような主語「雨滴」は述語「叩く」という動きの引き起こし手になることができ、目的語はその動きの受け手になることができる。7) と 8) も 6) と同じで、主語の「川風」、「阪神淡路大震災」は自ら動きを起こすエネルギーを持ち、外部の力を借りずに目的語に働きかけることができると考えられる。

ただし、6) ～ 8) のような文は動きの描写までにとどまり、目的語（の人やもの）に変化が生じたかどうかについて言及されていない。少なくとも下線部の他動詞文だけから見て変化が生じていることは読み取れない。例えば、6) の雨滴が窓にぶつかっても、窓が割れたわけではない。7) の川風が頬にあたっても、そこに何かができたり、変わったりすることはない。8) では大震災が子孫たちを襲ったが、子孫たちがどのような影響を受け、且つどのように変化したかについて言及していない。

一方、目的語に変化が生じた用例も観察されている。

9) 僕たちを乗せたタクシーは首都高速を下り、湾岸地区に入ると、海岸沿いをゆっくりと走った。太陽が傾きかけていた。西日が車内を満たし、元子や剛太を太陽が不吉に赤く染めていた。和虎たちのアジトが近づいてくると、緊張は押さえきれないほどに一気に高まった。(ニュートンの林檎)

9) は主語「太陽」が夕方赤い光を投げかけることによって目的語「元子や剛太」の外見を赤く変化させていることを描写している。

上で述べている自然現象名詞のほかに、下記の「枝々」、「樹」のような名詞が主語に立つ文も観察されている。これらの名詞は「雨」、「風」などと異なるように見えるけれども、それ自体の性質において事態を引き起こしている、このタイプの文の一種だと言える。

10) バスが南下するにしたがって森はどんどん深くなり、やがて樹木の枝々が道路にせり出してくるようになった。緑をいっぱい茂らせた枝々が、パタンパタンと頻繁に窓をたたく。道が狭くなるにつれて橋を渡る回数も増えていった。バスは着実に深い森の奥地へともぐり込んで行くようだった。(西アフリカ放浪)

11) 奔放に伸びた枝いっぱい濃緑の長い葉が茂り、雑木然としている。そんな樹が、秋を迎えて葉を落とし、だんだん蕾を膨らませると、色気を放ち始めるから不思議なものである。(サライ)

10) は、木々の枝が道までのび、バスがそれらに当たりながら進むのを、枝を主体にして描写しているのである。11) は樹から葉が落ちることを、樹の動きとして述べている。この 10)、11) のような他動詞文が 6) ～ 8) などと異なるのは、主語者内部の力の発動によって動きが生じているのではなくて、むしろ外部の何らかの理由や原因によって起きた出来事だということである。10) の場合、枝がバスの窓を叩くにはバスの動きが必要である。11) は、秋の到来・気温の低下が原因であると言える。

以上、このタイプの許容条件を満たす他動詞は次のとおりである。

上げる、与える、温める、圧迫する、彩る、受ける、失う、歌う、打つ、映す、裏付ける、追い抜く、追う、覆う、行う、襲う、収める、押す、落とす、下ろす、変える、抱える、掻き消す、隠す、飾る、掠める、刻む、傷付ける、切り裂く、強調する、下す、蹴る、壊す、遮る、下げる、支える、冷ます、刺激する、縛る、吸い取る、染める、叩く、立てる、保つ、散らす、直撃する、使う、掴む、包む、包み込む、募る、潰す、強める、照らす、照り返す、転換する、唱える、捕らえる、取り巻く、無くす、撫でる、濡らす、載せる（乗せる）、伸ばす、弾く（はじく）、放つ、引き起こす、引き受ける、浸す、冷やす、振る、撒き散らす、増す、巻く、守る、見下ろす、見せる、見詰める、齎す、持つ、求める、揺らす、許す、呼ぶ、喜ぶ、分ける

4.2. 事実上人の行為の表現になっているもの

この場合、主語は人のように振る舞うものではないけれども、人の感情・感覚を表現したり、文外の人々の行為の一部を描写したりするものである。事態全体が事実上人の行為の表現になっているため、無生物が主語に立っても許容されると考えられる。

主語の特徴から3つのタイプに分けることができる。

①主語が人の感情・感覚（知覚）であるもの

「感情」は物事に感じて起こる心持、喜怒哀楽などの気持ちのことを指し、感情を抱くのは言うまでもなく人である。「感覚」（知覚）は感覚器官に加えられた刺激によって生じる意識などをいう。両者はいずれも心を持つ存在、つまり人なしに存在し得ないものである。したがって、ある感情や感覚の発生を述べる文には、たとえ文中に現れなくても、背後に人が存在することが容易に想定できる。

12) 仏法の大道に基づいてそれを是正しようにも、仏法の世界にいる人たちが、廟堂や皇統のなかの権力者たちを仏法のために利用しているのだから、救いはどこにもないと思える。出口の見えない憂悶が正子を包んだ。仏門に入って、これで気持ちの安らぎを得たと思えたのは大きな間違いだった。（淳和院正子）

13) 王女や殉死した多数の従者がいた場所に、今自分が立っている。そう思っただけで、四千年前の古代に引きもどされる感動が私を襲った。私は王女の遺体が発見された台座近くにひざまづき、静かに合掌して冥福を祈った。（十六菊花紋の謎）

14) 私は何度も味わっていた酒だが、改めて自分でついだグラスを傾けた。ほのかな香が鼻孔をくすぐる。（「天の酒」殺人事件）

この場合の他動詞文は事実上人が感情・感覚（知覚）を抱くという一種の人間の行為の表現であると言える。

12) の「憂悶」、13) の「感動」は人の心の動きであって、その背後に心が動いた人が存在しなければならない。また、14) は感情ではなくて、鼻で「ほのかな香」を感じ取る、人の感覚を描写しているのである。

②主語が身体部位であるもの

「手」、「足」などの身体部位を表すものは人の一部であり、人の存在と密接に関係している。状況に応じて、その持ち主である人の意志によって具体的な動作を行うものである。身体部位を表わす名詞が主語に立つ場合、事実上人の行為の一部を切り取って描写するのだと考えられる。

- 15) 舞が必死に手を伸ばすと、ブレスレットが右手の指にひっかかった。あせりながらも、なんとか矢口の左手が舞の制服の襟をつかむ。けれど、舞の襟が破れそうになり、矢口は右手をさしだした。(ミニモニ。におまかせっ！)
- 16) 乗り越えなさい！もう一人のワタルの足が、沼の面を蹴った。何も考えられなかった。勇者の剣の柄に手を触れることさえできない。(ブレイブ・ストーリー)
- 17) たった今、部族の長達による談合が終わったところであった。彼らは長いコート
の裾を翻して自分達のヤクトに駆け寄ると、それぞれの部族に指示を下すべく、陽炎の立つ砂の丘陵に、姿を消していった。その光景を、一対の炎のような琥珀の目が見つめていた。(黒炎の貴公子)

15)、16)、17) において、下線部の他動詞文に表れていないけれど、文外に〈「左手」を使った人〉、〈「足」と使った人〉、〈「琥珀の目」を持つ人〉が存在することが想定可能である。即ち、実際に「つかむ」、「蹴る」、「見る」という動きを引き起こしたのはそれぞれ「左手」や「足」、「目」などではなくて、その背後に存在する人である。

③主語が人によってコントロールされているもの

主語名詞そのものは①にも②にもあてはまらないが、ある特定の人を、その人を主語の位置に立てず、関係物を主語に立てて表現することがある。このタイプはまた②と同様、人の行為の一部分を切り取って描写するのであると言える。

- 18) 雛杜の顔が屈辱に真っ赤に染まった。「もう許さん。俺の縛鎖錐の神髓を見せてくれるわっ」雛杜が同時に放った二本の鎖の先端の錐が、まっすぐに亜衣を襲った。
「ふん、こんな直線的な攻撃、かわすことなど造作もない」亜衣が軽いサイドステップで飛んできたふたつの錐をかわす。(神洲天魔鏡)
- 19) 兵士の一人が泥水に嫌気がさしたのか、立てかけてあった梯子で塹壕から這い上がり、地上に立った。彼は銃剣を構えて走り出した。途端に、機関銃の毎分五百発という弾丸が、彼を襲った。血しぶきが舞った。倒れた彼の死体は、ただの真っ赤な塊だった。(『瑠璃城』殺人事件)

18)、19) において、「錐」、「弾丸」をコントロールする人が存在することが容易に想定できるが、文表現上、その人を背後に隠し、コントロールされている部分だけを切り取って表現しているのである。

このタイプの許容条件を満たす他動詞は次のとおりである。

開ける、上げる、与える、温める、圧迫する、浴びる、表わす、威圧する、彩る、受ける、打つ、裏付ける、追い詰める、覆う、押す、襲う、落とす、下ろす、抱える、隠す、掠める、強調する、傷付ける、切り裂く、擦る、蹴る、壊す、遮る、擦る、支える、刺激する、叩く、立てる、直撃する、掴む、告げる、包む、転換する、止める、捕らえる、慰める、撫でる、残す、弾く（はじく）、引き受ける、引き起こす、塞ぐ、巻く、守る、見下ろす、見据える、見詰める、求める、揺るがす、許す、呼び出す、呼び止める、呼ぶ、分ける

4.3. 事実上自動詞述語文（あるいは名詞述語文）に相当するもの

目的語と他動詞との組み合わせが慣用的に自動詞相当の意味を表わすタイプの文がある。高橋（1975：4-6）ではこれを「合成述語」と呼び、「対格名詞と動詞のくみあわさった連語が、ひとかたまりになって自動詞相当となり、合成述語をなしているのである」と述べている。また、「これらの連語が自動詞にちかい性格をもっていることは、この種の連語からできた慣用句が非常に多いこと、また、その慣用句が自動詞にいいかえられることからわかる。」を指摘し、下記のような例を挙げている。

こしをおろす（＝すわる）、身をおこす（＝おきあがる）、あたまをたれる（＝うなだれる）、目をさます（＝おきる）、はらをたてる（＝おこる）

（高橋 1975：5）

このタイプの無生物主語他動詞文は、表面上は他動詞述語が使われているが、事実上自動詞（あるいは名詞）の意味に相当する。熊（2009：134）では、「この場合、目的語名詞への働きかけが要求されないため、主体性のない名詞（例：科学）でも主語になり得る」と述べ、「合成述語の文の述語動詞は、目的語と組み合わさって自動詞に相当することから、目的語に働きかける機能を失っていると言える。それが許容される理由として考えられるのは目的語名詞の性質である」と述べているが、本稿は異なる観点から考察することにする。

実例の調査から、高橋の言う合成述語と慣用句に相当するもののほか、名詞述語文に相当する用例も見いだせる。本稿では、合成述語と慣用句に相当するものという二つの場合を合わせて「自動詞述語文に相当するもの」にすることとする。

以下、「自動詞述語文に相当するもの」と「名詞述語文に相当するもの」のそれぞれの場合に当てはまる実例を見ていく。

①自動詞述語文に相当するもの

例 20) ～ 23) は慣用句として使われている用例である。

20) の述語部「幕をあける」は「幕を開けて、芝居などを始める」という意味から「物

事が始まる」ことを表わすのに転用されている。下線部は「丸の内の時代が始まる」に相当する。21) ～ 23) の「幕をおろす」、「終わりを告げる」、「終止符を打つ」はいずれも「終わる」ことを表わしていて、下線部の他動詞文はそれぞれ、「「郡評論争」は終わった」、「パーティー全盛時代は終わった」、「彼らの恋愛は終わった」という自動詞文に相当すると言える。

- 20) ただ結論だけ述べるなら、渋沢が三菱の岩崎弥之助に敗れ、兜町の時代は終わり、三菱による丸の内の時代が幕をあける。(江戸・東京を造った人々)
- 21) 奈良時代、大宝令下の養老四(七百二十)年に完成した『日本書紀』に書かれた「大化改新の詔」にある「郡」は、大化年間の地方行政区分表示の「評」が正しく、「郡」に書き換えられていることがわかって、「郡評論争」は幕をおろしました。(正倉院薬物の世界)
- 22) 福岡での参院補選の直前に政治改革の実を示す狙いだが、これで党四役、閣僚、派閥の資金パーティーは自粛によって実施できないことになり、パーティー全盛時代は終わりを告げた。(永田町の暗闘)
- 23) ティテュスが手紙を読んだあと、ベレニスはティテュスの腕の中に倒れる。だがティテュスは彼女を腕に抱いても、言いわけのような長台詞しか言わない。こうして、彼らの恋愛は終止符を打つのである。(パリの芝居小屋から)

次の 2 例は対になる自動詞のある他動詞が使用されている用例である。この場合、他動詞と目的語との組み合わせが他動詞と対になる自動詞に相当すると言える。

- 24) 「月岡?」「ええ、それと高桑さん」「どういことですか?」男の目は警戒の色を強めた。(美濃路殺人事件)
 - 25) 顔がひどい日焼けをしたみたいヒリヒリと痛む。後手に縛り上げられた手首が感覚をなくしている。さほどきつくはないから、すこし我慢すればなんとか解けるだろう…。(銀河乞食軍団)
- 24)、25) において、下線部の「男の目が警戒の色を強めた」は「男の目の警戒の色が強まった」に相当し、「手首が感覚をなくしている」は「手首の感覚がなくなっている」に相当する。

また、下記の 26)、27) のような用例は、慣用句に相当するものでもなければ、対になる自動詞があるわけでもないけれども、述語部「音を立てる」から「音が鳴る」ということ、「バランスを失う」から「バランスがくずれる」ということが読み取れるため、意味的に自動詞文に相当するものとして位置づけられる。

- 26) 「くるぞー…。」ひざがむしょうにふるえ、歯がカチカチと音を立てる。まもなく、ウオーン、ウオーンが聞こえてき、高射砲の音がはげしく聞こえだした。(緑の島はるかに)

- 27) 日本人の食生活は、以前の自然なバランスを失い、極端な肉食や加工食品のはん
らんで大きくかたよってきている。(アレルギー体質改善はこれしかない)

意味的に自動詞文に相当するものの中には存在あるいは消失を表わす用例もある。これらはいずれも、主語の指すものと目的語の指すものが存在物と存在場所（あるいは存在場所と存在物）という関係をなしていると考えられる。文全体でものがある場所に存在する、あるいはその場所から消失することを表わしている。

下記の 28)、29)、30) は目的語の指すものが主語の指すものの存在する場所である用例である。

- 28) 本文中には武田久吉、木暮理太郎、野口末延諸氏と著者自身によって撮影された計二十葉の写真が入っているが、それに加えて、ヘルマン・ヘッセから贈られた湖畔を描いた水彩画（この文庫ではカヴァーに使用）が巻頭を飾っている。そしてこの豪華というより質の高い『山の絵本』は、扉の次に「河田楨君にささぐ」と印刷されている。(山の絵本)

- 29) しかし路はいよいよ陰悪さを増した。ところどころ大岩が絶壁のように行手を立ちふさいでいたし、朽ちた大木が路をさえぎっていた。(山の民)

- 30) 志方 嘘ですよ。ただ海上自衛隊の船は神戸港にいっさい入ったことがないわけですから、もたつくわけですね。それと、道路を倒壊した家がふさいでいて、それを撤去しようとすると、私有財産ですから、誰がどんな権限で壊すんだ、ということになる。(日本の針路)

28) は「水彩画」が『山の絵本』の「巻頭」の位置に書かれていて、そこに存在することを表わし、29) は「朽ちた大木」が倒れていて「路」にあることを、30) は「倒壊した家」で「道路」が充満していることをそれぞれ表現している。

31)、32) は主語の指すものが目的語の指すものの存在する場所である用例である。

- 31) さて、プログラムを改良するに当たって FBI が実施した最初のことは、修正されたデータ収集システム用に、犯罪の新たな定義と新たなデータ内容を開発する際の契約を査定することであった。そして、この契約事項は、以下のものを含んでいた。(現代アメリカ犯罪学事典)

- 32) プラハの石畳は、主に花崗岩あるいはそれとよく似た堅い鉱物でできている。チェコの花崗岩は独特なピンクの色合をもって、石畳を彩っている。(プラハ幻景)

31) では、「この契約事項」に「以下のもの」があることを示唆し、32) では、「チェコの花崗岩」に「独特なピンクの色合」が備わっていることを表わしている。

33) は主語の表わす場所から目的語の指すものが消失する用例である。

- 33) 新吾たちは話に夢中で、眼の前にとうにもりが出されていたことすら、気づいていなかった。麺がいささか水気を失っている。「すまん、ご亭主。食べる、食べる。」

腹がへっているんだ」新吾が急いで蕎麦を手繰りはじめると、仙之助も廉平もあわてて箸をとり、それからはしばし蕎麦を啜る音だけが響いた。（小説すばる）

33) の「麺」から「水気」がなくなるというようなものは、上の例 30) ～ 32) と逆に、元々あったものが存在した場所から消えてしまったことを表わす。下線部は「麺の水気がなくなっている」という文に相当すると言える。

②名詞述語文に相当するもの

「〇〇を意味する」、「〇〇を象徴する」などが述語になる場合、他動詞文はモノやコトが「〇〇という意味である」、「〇〇の象徴である」ことを表わす。34) は、「死刑の執行が法律上当然に免除されるという意味である」に相当し、35) は、「その王冠は王室の象徴である」に相当する。

34) 「刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ時効ニ因リ其執行ノ免除ヲ得」ここに言う「執行ノ免除ヲ得」とは、どういう意味か。死刑の執行が、法律上当然に免除されることを意味する。法律上当然に、とは、裁判所の判断を得ることなく、当然に死刑の執行が免除されるということだ。（法廷博物学）

35) 千七百七十五年、王室の援助により王室製陶所として発足したデンマークのトップ・ブランドで、王冠の下に三本の波を描いた同社のマーク、その王冠は王室を象徴し、三つの波はデンマークを流れる三本の水路を意味する。（コーヒー博物誌）

以上、このタイプの許容条件を満たす他動詞は次のとおりである。

開ける、与える、浴びる、表わす、暗示する、意味する、受ける、失う、打つ、映す、歌う、裏付ける、描く、追い込む、覆う、収める、押す、襲う、落とす、帯びる、下ろす、変える、抱える、掻き消す、隠す、囲む、飾る、掠める、語る、刻む、傷付ける、切り裂く、強調する、区切る、擦る、遮る、下げる、支える、さす、刺激する、縛る、示す、遮断する、象徴する、透かす、救う、染める、叩く、立てる、保つ、散らす、直撃する、掴む、作る、告げる、伝える、包む、包み込む、強める、捕らえる、取り巻く、慰める、無くす、濡らす、残す、載せる（乗せる）、伸ばす、弾く（はじく）、放つ、引き起こす、浸す、冷やす、塞ぐ、含む、解す、撒き散らす、巻く、増す、見せる、満たす、迎える、齎す、持つ、戻す、宿す、揺すぶる、揺らす、揺るがす、呼ぶ、分ける

5. 終わりに

本稿は大量のデータをもとに、日本語の書き言葉における無生物主語他動詞文の全体像について一通り見てきた。無生物主語他動詞文が許容される条件は大きく 3 つに分けられる：「人に準じるものが主語に立つもの」、「事実上人の行為の表現になっているもの」、「事実上自動詞述語文あるいは名詞述語文であるもの」である。第 4 節で述べたように、調査

した無生物主語他動詞文のうち、この 3 つの条件のどれか一つを満たすものが約 98.1%を占める。名詞句階層で説明できない無生物主語他動詞文が 3 割以上あることと比べて、従来の名詞句階層説よりも、複数の許容条件を想定することによる説明のほうがより説明力があることを示唆する。

それぞれのタイプに分類されている実例をみると、述語他動詞が同じでも、満たしている許容条件が異なることがわかる。たとえば、下記の 36) は、主語の「店々」が組織・機関名詞であり、全体がひとつの単体として一個の人のように行動するとみられることで、「人に準じるものが主語に立つもの」の条件を満たしている。37) は、身体部位を表わす名詞が主語に立ち、事実上人の行為の一部を切り取って描写するのだということで、「事実上人の行為の表現になっているもの」の条件を満たしている。38) は、「幕を開け」が「始まる」の意味であり、「事実上自動詞述語文に相当するもの」の条件を満たしている。

36) だが、七時すぎて、「今日は尼宮様はお上がりにならんようで…」と訂正した。「へえ、休みの時もあるのか？」八時半。門前町の店々が一斉に戸を開けた。(日本列島すぐ蕎麦の旅) (=例 1))

37) 岩田勝也は、そのまま部屋の出入口まで行こうとした。襖に手を伸ばそうとしたとき、僧形の男が左手を鋭く振った。その手から何かが飛び出したと思うと、岩田勝也は左足を取られて前のめりに倒れていた。岩田の両手が襖に穴を開けていた。(怒りの神拳)

38) 道化のリゴレットが村中を走りながらこう告げるシーンで、この大河ドラマは幕を開ける。(朝までビデオ)

同じような状況は述語が「襲う」である例からも見られる。「襲う」は「人に準じるものが主語に立つもの」(例 39))、「事実上人の行為の表現になっているもの」(例 40)) のそれぞれに用いられることがある。

39) 平成七年一月十七日午前五時四十六分、震度七の大地震が兵庫県南部を襲いました。阪神・淡路大震災です。戦後最悪の被害をもたらした都市型震災は六千四百三十二人の尊い命を奪いました。(広報京丹波)

40) ザザザッと音をたて、セイラは宙に舞った。長い蹴爪が少年を襲った。無造作に、少年は首を横にずらした。わずかに体勢が乱れる。(墮天戦士)

このことは、動詞の種類は許容条件に直接の関係を持たないことを示唆している。同じ動詞を使っている、その文が許されている事情が全く異なる場合があるのである。3 種類およびその下位類はそれぞれ独自の事情で許容条件となっていると言えよう。

また、ひとつの文が複数の許容条件を満たす場合がある。たとえば、乗り物名詞が主語に立つ文は第 1 種の許容条件を満たし、第 2 種の許容条件の③を満たすこともできる。たとえば、例 41) は、外から見れば、「乗用車」が自らエネルギーを発する性質を持ち、一個の人のように動くことができるため、第 1 種の許容条件を満たしていると言える。一方、「乗

用車」を操作する人の存在を重視し、「乗用車」の動きが事実上操作する人の動きの一部分を切り取って描写するものに見れば、第2種の許容条件の③を満たしていると言えよう。

- 41) 国道十号線に出てバス停に立っていると、小倉のほうから走って来た乗用車がスピードを落とし、二十歳ちょっとくらいのカラーシャツにネクタイの男が乗せてやろうというように笑いかけたが、畑千代子は背中を向けて海のほうを見た。(復讐するは我にあり) (=例4)

本稿で検討したのは無生物主語他動詞文の許される条件であって、ひとつの文が複数の条件を満たすものがあったとしても当然のことである。

最後に次の2点を補足しておく。1つは、本稿で提案する3種の許容条件のほか、下記の例42)のような、主語が原因である「原因・結果関係」を表す無生物主語他動詞文が存在する。

- 42) 沼田のこの童話は大学生の頃の習作だったが、好きな作品のひとつである、このあと、村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村の人を病気にする話になるのだが、それは童話にしてはあまりに辛い話になるので、切ってしまった。(深い河)

もう1つは、本稿で調査した134語の中にはBCCWJにおいて無生物主語他動詞文の実例が観察されない他動詞もある。

下す、蹴飛ばす、吊り上げる、連れ戻す、包囲する、掘り返す、巻き戻す

上記の2点についての検討、および各他動詞の実例数の統計的分析など、今後の課題とする。

参考文献

- 天野みどり (2002) 『文の理解と意味の創造』 笠間書院
池上嘉彦 (1980) 『「する」と「なる」の言語学言語と文化のタイポロジーへの試論』 大修館書店
池上嘉彦 (1980-81) 「‘Activity’ - ‘Accomplishment’ - ‘Achievement’: 動詞意味構造の類型」
『英語青年』 1980年12月号～1981年3月号 研究社出版
井上和子 (1976b) 『変形文法と日本語・下』 大修館書店
井上和子 (1995) 「他動性と使役構文」 徳永美暁 (編) 『研究報告 (1995): 言語変容に関する体系的研究およびその日本語教育への応用』 神田外語大学 pp.109-136
かねこひさかず (1990) 「非情物主語の問題から」 『国文学解釈と鑑賞』 第55巻7号 至文堂 pp.36-46
佐藤里美 (1990) 「使役構文の文 (2) —因果関係を表現するばあい—」 『ことばの科学』 4
むぎ書房 pp.103-157
車魯明 (2014) 「無生物主語の他動詞文について」 (修士論文)

- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』第 103 集 pp.1-17
角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版 (2010 改訂版)
熊鷹 (2009) 『鍵がドアをあけた日本語の無生物主語他動詞文へのアプローチ』笠間書院
熊鷹 (2014) 「日本語無生物主語他動詞文の許容に影響を与える要因とその関係」『日本語
日本文学』第 10 号 学習院大学大学院人文科学研究科 pp.94-110
吉川武時 (1976) 「無生物主語をめぐる問題点について」『日本語学校論集』第 3 号 東京
外国語大学外国語学部附属日本語学校 (留学生日本語教育センター) pp.123-137

Silerstein Michael (1976) 'Hierarchy of featuers and ergativity'. In R. M. W. Dixon(ed.),
Grammatical categories in Australian languages. Canberra: Australian Institute of Aboriginal
Studies, and New Jersey: Humanities Press. 112-71

調査資料

- 小野不由美 (2003) 『くらのかみ』講談社／角田光代 (2007) 『八日目の蟬』中央公論新社
／川端康成 (1971) 『雪国』講談社文庫 (初出 1937 年) ／シナリオ作家協会 (2002) 『'01
年鑑代表シナリオ集』映人社／夏目漱石 (1950) 『坊ちゃん』新潮文庫 (初出 1906 年) ／
福田靖、大竹研、田辺満、秦健日子 (原作) (2001) 『HERO』扶桑社／古沢良太 (2012) 『リ
ーガルハイ』扶桑社／東野圭吾 (2008) 『流星の絆』講談社／本多孝好 (2005) 『MOMENT』
集英社／本多孝好 (2006) 『FINE DAYS』祥伝社／本多孝好 (2007) 『正義のミカタ～I'm a loser
～』双葉社／本多孝好 (2012) 『WILL』集英社／吉本ばなな (1998) 『キッチン』角川文庫

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』国立国語研究所

(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>) (最終確認日 : 2017 年 11 月 30 日)